



Clinical impact of gastrectomy for gastric cancer patients with positive lavage cytology without gross peritoneal dissemination

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2022-10-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 拓史 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000417

論文内容要旨

しめい 氏名	こばやし ひろし 小林 拓史
学位論文題名	Clinical impact of gastrectomy for gastric cancer patients with positive lavage cytology without gross peritoneal dissemination (肉眼的腹膜播種を伴わない腹腔洗浄細胞診陽性胃癌患者に対する胃切除の臨床的意義)
<p>背景：肉眼的腹膜播種を伴わない腹腔洗浄細胞診陽性胃癌（P0CY1）患者の生命予後は不良であり、これらの患者に対する胃切除の予後延長効果は確立されていない。</p> <p>患者と方法：本研究は地域基盤型コホート研究であり、P0CY1 患者に対するリンパ節郭清を伴う根治的胃切除術の影響について検討した。2008 年から 2015 年に 3 次医療圏のがん診療連携拠点病院全 9 施設で Stage IV の胃癌と診断された患者を対象とした。手術または審査腹腔鏡検査において、原発巣と腹腔洗浄細胞診の両方で組織学的に腺癌と証明された患者を登録した。さらに、術前画像検査で検出不可能な少量の腹膜播種を有する患者（P1）を抽出した。主要アウトカムは、全生存に対する胃切除術の調整ハザード比とした。また、胃切除術または化学療法を受けた患者の生存時間を、胃切除を行わず管理された患者または best supportive care を受けた患者と比較して評価した。さらに、P0CY1 と P1 の全生存期間を比較した。</p> <p>結果：104 人の患者が登録された。胃切除術の調整済みハザード比（95%信頼区間）は 0.677 (0.411-1.114、$p=0.125$) であった。胃切除術を受けた患者（74 人）の生存期間中央値は 21.7 ヶ月、手術なしで管理された患者（30 人）の生存期間中央値は 20.5 ヶ月（$p=0.155$）であった。化学療法を受けた患者（76 人）の生存期間中央値は 23.0 ヶ月、化学療法を受けなかった患者の生存期間中央値は 8.6 ヶ月（$p<0.001$）であった。P1 の生存期間中央値は 12.9 カ月だった。</p> <p>結論：胃切除術は P0CY1 胃癌患者の生存期間を改善するために有効ではなかった。外科医は初回治療として手術よりも化学療法の実施を優先させるべきである。</p>	

※日本語で記載すること。1200字以内にまとめること。

学位論文審査結果報告書

令和 4年 7月 11日

大学院医学研究科長 様

下記のとおり学位論文の審査を終了したので報告いたします。

記

【学位申請者氏名】 小林 拓史

【学位論文題名】

Clinical impact of gastrectomy for gastric cancer patients with positive lavage cytology without gross peritoneal dissemination
(肉眼的腹膜播種を伴わない腹腔洗浄細胞診陽性胃癌患者に対する胃切除の臨床的意義)

【審査結果要旨】

胃癌患者において、腹膜播種を伴わない腹腔洗浄細胞診陽性 (POCY1) 症例を術前に評価することは難しく、手術中に明らかとなった場合、胃切除術を選択する外科医が多い。ガイドラインでは、胃切除と化学療法の組み合わせによる集学的治療で 25%程度の 5 年生存率が存在することから、根治切除も推奨されている。しかし、対象症例が少ないため、POCY1 胃癌症例に対する胃切除の有効性を示すエビデンスに乏しく、本論文では、POCY1 胃癌症例に対する外科手術の意義を明らかにするため、福島県内のがん拠点病院 9 施設より対象症例を集積し後ろ向きコホート研究で検討した。

StageIV 胃癌 1366 症例から肉眼的腹膜播種、他臓器転移など有する症例を除いた、POCY1 104 例 (胃切除 74 例、未実施 30 例) を対象とした比例ハザード分析の結果、化学療法のみが患者生存を延長する有意な因子であることを示した ($p=0.003$)。一方、胃切除の有意性は示されなかった ($p=0.125$)。また、4 グループ (胃切除+化学療法、胃切除のみ、化学療法のみ、緩和治療) による層別化解析の結果では、治療法による生存率に有意差が確認されたが、各群間での比較は示されておらず、治療成績の優劣に関しては論じられていなかった。以上の結果を持って、POCY1 胃癌症例に対する胃切除は生命予後の改善効果は乏しく、外科医は、胃切除に先んじて化学療法を検討すべきであると結論づけた。

小林拓史氏が実施した研究と同様の研究が過去にも報告されているが、今回の研究の優位性は、最も症例数が多いこと、また、多施設からの症例集積による検討という点にある。統計解析も適切に実施されており、その結果は信頼できるものであると判断した。

審査会では、統計解析法、長期生存に対する胃切除の効果、胃切除に生命予後改善効果なしとした結論の妥当性、または、指導教員の本研究への関与に関する質問が出されたが、小林拓史氏はそれぞれの質問に対して的確かつ明快に回答した。一方、実臨床へのフィードバックを考慮した際に、術前化学療法や conversion surgery の効果を評価するためには、十

分な症例数を集積できなかつたことは本研究の limitation としてあげていた。

学位審査を通じて、申請者本人が論文の作成に深く関与していることが明らかであると考えられた。論文の内容も POCY1 患者に対する手術適応という実臨床上重要でかつ未解明な clinical question に焦点を当てたものであり臨床的な意義は高いと考えられる。以上より、本研究は、本学医学博士授与に値すると判断できる。

論文審査委員 主査 見城 明
副査 木村 隆
副査 高木忠之